

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科  
(博士後期課程) 地域政策科学専攻

# プロジェクト研究報告集

2022.3 No.19

令和3年度  
プロジェクト研究報告会

## 環境・災禍と人間

地域内外の視点から見る  
良い暮らしの創造



鹿児島大学大学院  
人文社会科学研究科 地域政策科学専攻



## 今年度のプロジェクト研究について

平井一臣  
(プロジェクト研究担当)

「プロジェクト研究Ⅰ・Ⅱ」は、地域政策科学専攻（博士後期課程）の必修科目のひとつです。この授業では「プロジェクト研究Ⅰ」の受講生がテーマを設定し、それにもとづいて研究を進め、「プロジェクト研究Ⅱ」の受講生は前年度の経験も踏まえ適宜アドバイスをを行います。その成果を毎年の報告会で発表し、報告書を作成しています。

今年度は人類学と政治学を専攻する合計2名の院生が報告者となりました。例年に比べると非常に少ない人数だったため、2名の報告を中心としながらも、通常アドバイス役に徹する院生にも研究の途中経過報告を行ってもらいながら進めてまいりました。また、昨年度に続き新型コロナウイルス感染症の感染対策として授業の実施形態をオンライン形式にて行うことになりました。フィールドワークのような質的研究を主たる研究手法としていた院生は、調査を実施すること自体が困難な状況にあったのですが、様々なアドバイスを参考にして工夫を凝らしながら報告の準備作業にあたりました。

今年度の統一テーマは「環境・災禍と人間—地域内外の視点から見る良い暮らしの創造—」としました。2人の報告者の専門分野は異なっていますが、環境・災禍に人間はどのように向き合うのかという課題設定においては共通性を有しています。また、環境の破壊が災禍を生み災禍がまた環境の変容をもたらすという意味で、環境と災禍は相互に関連する問題でもあります。このような大きな問題を、具体的な地域のフィールドの視点から接近するとともに、閉ざされた地域としてではなく、地域の内と外という観点から考察することを通して、環境・災禍と人間の関係について立体的に捉えることができるのではないかと。このような問題意識を反映したものが今回の統一テーマです。

以下、簡単に報告内容を紹介していきます。夏晨光さんの報告「風水と現代生活—青島市の風水事例を中心に—」は、中国に古くから伝わる風水

信仰が現代中国社会でどのように機能しているのかを考察しました。風水の基本概念についての説明を行ったうえで夏さんは、青島市における建造物の配置や建造物内の空間構造、住居空間などにおいて、風水の考えをどのように受けとめどのように活用しているのかという事例を紹介しました。これらの事例の検討を通して、現代中国でも風水は大きな影響力を持っているものの、必ずしも正確な知識に基づくものではないこと、また、仏教や道教など他の信仰との境界線が曖昧であること、といった特徴を指摘しました。

石原明子さんからは「水俣と福島が出会うとき—原発災害被災者等の水俣訪問ツアーによるアクションリサーチ」と題した報告がありました。紛争解決学の研究を続けている石原さんは、水俣病と福島第一原発事故という地域内で大きな存在感をもつ大企業が引き起こした災禍に向き合う地域の共通性に着目し、自らが企画立案した水俣ツアーの実践のなかで、紛争解決における交流の意義と条件を明らかにしました。また、石原さんは、すでに2013年、14年に同様の調査を実施しており、前回調査との比較を通して、この間の意識の変容にも迫りました。

今回の報告会は「環境・災禍」に対する人びと向き合い方について、それぞれの学問的な立場から誠実に応えようとしたものです。昨年度に続き今年度もまた、コロナ禍のなかでの「プロジェクト研究」は大変な部分も多かったかと思いますが、この過程で得た経験は後に必ず生きてくると信じています。今後も引き続き研究に励んでいてもらいたいと思います。

---

平井 一臣 (ひらい かずおみ)

鹿児島大学法文学部法経社会学科教授。大学院人文社会科学研究所地域政策科学専攻「地域政治論」担当。



## 目 次

### 巻頭文

今年度のプロジェクト研究について

平井 一臣

*i*

### 報告

風水と現代生活

—青島市の風水事例を中心に

夏 晨光

1

水俣と福島が会うとき

—原発災害被災者等の水俣訪問ツアーによる

アクションリサーチ—

石原 明子

7

プロジェクト研究報告会概要

江 山

19

プロジェクト研究を振り返って

22



# 風水と現代生活

## ——青島市の風水事例を中心に——

人文社会科学研究所 地域政策科学専攻 文化政策コース1年  
夏 晨光

### 問題提出

自然とは如何なるものなのか。この問題は統一された答えはないと思われる。違う背景のある人間はそれぞれの認識があり、たとえ今日の科学が自然を有機物や無機物等の物質と光熱電等のエネルギーの組み合わせを研究しても、果たして運や神様を信じる人々がこの解釈だけで満足させられるわけがないであろう。

風水説では、万物は自然に流れる「気」によって形成されており、その「気」の状態によって幸福、あるいは災いをもたらすとされている。そして、地下や空中を流れる「気」を人為的に操作することで、それぞれが求める目的や状態を達成することができる信じられている。近年では、自然科学の発展によって否定されることも顕著にみられるが、不安な心理を慰めることができる風水は依然として中国人の生活に根差している。本研究は現代都市である青島市の風水事例を基に、風水の変容及び風水を信仰する動機を明らかにすることを目的とする。

### 1. 風水の基本的概念

#### 1.1 風水の定義

風水大宗師とされた郭璞はその著作である「葬書」に風水を「葬は氣に乗ずるなり。經に曰く、氣は風に乗じて即ち散んじ、水に界されて即ち止む。古人これを集めて散んぜしめず、これを行かせれば止まらむ。ゆえにこれを風水という」(村山 1931 5)と定義した。彼は自然を循環する「気」を環境と人間の繋がりとし、「気」の性質と豊かさで人間世界の縁起を説明した。例えば、彼は親族の遺体に対して、「人は父母から体を受け、故に(両親の)遺体が氣に恵まれ、

子孫が余慶を得る」と述べた。更に「風水」の定義は他の本にも言及された。「葬書」の源と自称された「青島先生葬經」には「陰・陽が符合し、天地が交通すれば、内気は萌え生じ、外気は形を成し、内外の気が相乗して、風水おのずからなる」という「風水」の説明もあるのである。

人類学の視点からみると、「風水説」は「古代中国に発し、現代東アジアおよび東南アジアその他の周辺地域にも影響の及んだ、独特な環境判断、環境影響評価法、相地卜宅の方法論の総称である。風水説は環境を整えることによって、いかに地気の好影響を確保するかの方法論を指すようになる」(渡邊欣雄 2001: 37、38)のであり、「中国の殷周時代における都市計画事業である都邑造営の際に行われた『相地』や『相宅』に起源したもので、天地の陰陽二気が自然に相調和する地域を選んで都城や村落を営み住宅を造ることを本義とする学問である」(張翠萍, 北原理雄 1998)と解釈された。

風水は漢代の「相地」・「相宅」発展してきた環境判断理論として、「形法(学)」の一部であった。元代学者の呉澄(1249-1333)は「相地と相人…実は二術一体である。後人は(相地と相人)を兼備し得ないため、一部のみ習った。こうしてのちに二種の術になった」と評し、清代学者の紀昀(1724-1805)は「宮宅地形(相宅)は最初『漢書・芸文志・形法家』から相人・相物と並列しており、即ち其の術(相宅)は漢代に発源した」(『四庫全書総目提要』卷一百九子部十九)と示した。

上述のように、「風水説」は漢代に発した「気」の判断理論で、自然に流れる「気」を探し出し、人間に好影響を確保するかの方法論になる。「気」という中

心の利用によって、家族または地域全体の人に繁栄をもたらすと信じられている。

## 1.2 「気」と「龍脈」

風水理論に提出された「気」が実は漢字「炁」の転じである。「炁」は風水環境に存在する一種のエネルギーで、空中・地面及び地下を循環して、万物を生じる。清代の哲学者方以智（1611-1671）は気と自然の相互関係について、「気が凝ると固体になり、噴くと光になり、穴を通ると声になる。全てが『気』によるものである」と説明した。風水理論は「気」の利用方法論で、「気」の状態及び潤沢により、人間に「福祿寿」或いは「災貧死」をもたらしたと言われている。「気」の豊かな環境は選良が輩出して、「気」の乏しい環境は貧苦に耐える。特に不吉とされた環境には「殺（煞）気」が生じ、一家断絶する恐れがある。

「気」は自然界に存在している一種のエネルギーとして、「龍脈」を流れ、「（龍）穴」という場所から湧き出し、人間の世界と接続した。「龍脈」は実は山脈を指すのである。古代中国は山脈が龍のように曲がりくねるため、龍と見なした。風水は全ての龍脈が崑崙から起源し、世界の隅々まで広がると信じられた。中国には西から東向きの主脈が三つあるとされる。

更に、山脈の規模によって、主脈と支脈があり、その形状によって、「気」の性質と豊かさも区別された。『龍穴』とは天と地の造作であり、天と地の精髓を凝集したものである。『龍穴』の恩恵を受けた人物は、人間社会の最も尊い、最も偉大な存在になると考えられている。ただし、「龍穴」の霊力は、直接生きている人間に作用するより、むしろ祖先の骨を経由するほうが多い。祖先の墓が最良の風水地に作られれば、子孫は自然に最良の運命に恵まれる」（聶莉莉 2000 64）。

## 1.3 陽宅風水と陰宅風水

風水理論は其の判断対象によって、「大別して陰宅風水（祖先の住まいの風水・墓地風水・墓相）と陽宅風水（コミュニティを含む人間の住まいの風水・陽基風水）の二種に分けられる」（渡邊欣雄 2001 40）。特に風水が創出されてから今日にまで一千年以上の間、

陰宅風水は「陽宅風水」に優り、風水判断の主な内容となった。牧尾良海氏は「当時の葬書では、山川岡畷の形勢を相し、歲月日時支干星位にかんがみて埋蔵するときには、子孫の貴賤貧富夭賢愚は凡てこれに繋がることを教えているために、挙世信じてこれに惑い、喪親の者にして、勝地なく適時あらずとして久しく葬らず、甚だしきに至っては終身もしくは累世にわたるも葬らぬ者もあったという」（牧尾良海 1974 365）と当時の風水状況を述べた。

中華人民共和国の建国以来、山や田圃に散らばった墳墓は当時の政策に皺寄せ、次第に消失され、政府に区画された霊園に移させられた。そして、「陽宅風水」も昔家族に所有された土地を判断対象とするエクステリア風水から、国有の住宅団地に属する各々のアパートを判断対象とするインテリア風水に変更した。

## 2. 風水説話と風水実践

### 2.1 風水説話について

「風水説」は人間と自然界、および死者の世界まで影響を及ぼす環境判断理論として、先秦時代から発した諸学問に内包された古代中国人の素朴な世界観を取り込んだのである。鬼神・陰陽・宿曜・卜筮・八卦などという呪術的神話的な要素が風水判断の筋合に普段現れ、風水説話による世事に対する説明も広く認識されていた。

特に自然科学に未熟である時期において、古代中国人は偶然の巡り合わせによる思いもかけない大きな利益と予測不可能の有害な力に際し、「風水説」を実用主義的な方法論として適用されていた。例えば、福建省福清市における断脈塔の風水説話が一つの例となる。明代の宰相として、榮の極めだった葉向高が年を取ると、政争に巻き込まれ、権力闘争に敗れ去った。一時権力を握っていた彼は政争の残酷を痛感し、後進者に二度と自分の体たらくを経験させないようため、当地の風水を破壊すると決断した。彼は小孤山に瑞雲塔を建てさせ、牛穴形をした小孤山の「気」を弱め、福清一帯の風水を封じたという。

「風水説」は深刻な影響のある方法論として、地域だけでなく、国勢にも波紋が広がる。御陵のような王権を象徴する風水環境の破壊によって、戦争ないし政



権の勢いが揺れられたと信じられていた。明朝第十七代の皇帝崇貞帝は農民反乱にあたって、戦争を終結するため、反乱指導者である李自成の先塋（祖先の墓）を破った。相手の李自成も鳳陽県にある朱元璋（明朝の建国者）の墓を壊した。そして、国共内戦に際し、戦争の定めを決着する力のあるとされる毛翼臣（毛沢東の祖父）の墓をめぐる当地の農民たちと国民党軍の驚異たる説話も「毛沢東家世」と「韶山導遊」に記された。

今日になると、風水説話が都市開発をめぐるものが多い。例えば、遼寧省新賓満族自治県が堰の建設工事に際し、事故が頻繁に起き、当地の住民達は工事に掘り出された大きな怪しい石が当地における王八蓋山（亀の山）の頭と見なされ、堰工事は亀（山）の水飲み場を入れ替えたという風水的な説明で事故の原因を解釈した。結果として、県政府は大石を元の場所に戻し、堰をもとの位置より二十メートルほどの下流にずらした。

風水説話が現代の中国人にも耳慣れると考えられる。説話の根拠である「風水説」は「階層を超え、時代を超えて中国の社会と中国人のものの考え方に今なお影響し続けているのである」（韓敏 2000：73）。

## 2.2 青島市における風水実践と風水説話

風水をめぐる種々な解釈は統一されたものではなく、地域色のある説明がよく見られた。特に風水理論に詳しくない住民の間、宗教・民間信仰・都市伝説・素朴な自然哲学等を含めた風水的説明は専門の説明より人気があり、広く知らされていた。そのため、其々の風水実践や説話を理解するには地域の経験が必要となる。

青島市は人口が1千万を越えた若い都市として、中国の最も経済の発達した沿海地区にあり、現代社会にもたらした衝撃が顕著である。風水を含め、民間信仰や地域文化がどのように中国の現代都市で生き延びるかという課題に対して、青島市で実施した調査は解釈の端緒になると考える。そして、筆者は青島市で何十年間にわたって生活する経験があり、当地の社会的背景や地元住民の考え方も知悉しうるため、青島市を選定した。

### 事例一 高苑路1号

高苑路1号は風水が悪いと言われた。親族がそこに住んでいる60代調査協力者のLさんによると、高苑路1号は対面になる建物の山牆に影響され、地気が悪くなった。そこで住んだ住民達は災いが絶えず、生活も散々になった。Lさんの親族（従兄弟）がそこで住んでいた時、妻が肺癌で亡くなり、2人の子供も亡くなった（一人は夭折、一人は殺された）。



図1 高苑路1号

### 事例二 天虹花園

天虹花園は嶗山区と市南区の境目に位する高層ビルである。ビルの近くに地下鉄の駅があり、青島大学も隣接した。此のエリアは青島市の高価な地区に位置するため、平均地価は91万円/㎡になったが、天虹ビルの地価は50.4万/㎡だけ値する。調査対象であった1501号室と1502号室は周囲のアパートより4000万ぐらい安くなった。不動産会社のS1さんによると、(天虹)ビルは道路と衝突する「路沖」ので、風水が悪いと言われた。そして、部屋はビルの全体構造に影響され、間取りも「不方正（長方形ではない）」になった。丸い壁があるだけでなく、隣人の門との距離も狭い(中間戸と呼ばれる)である。住宅の風水が良くないとき



図2 不方正の応接間

れたため、周囲の物件よりかなり安くても、人気がないと教えてくれた。

### 事例三 中海公寓

中海公寓は市北区に位する住宅団地である。調査は団地の2号棟で行われ、そこで一軒のアパートを擁した40代のUさんをインタビューした。彼女は大学時代から風水に興味になり、本で風水理論を自習した。結婚して、中海公寓に引っ越した彼女は自宅の風水欠陥を発見して、近隣関係や家族関係等に悪影響のある自宅の風水を自力で改善した。特に住宅にある最も重要な衝突（欠陥）の改善を通して、望み通りの結果を出した。



図3 寝室の欠陥

医学大学に出身した彼女は風水実践について、様々な感想がある。例えば、「風水は人間関係そのものである」や、「門の位置関係というより、むしろ人間関係といったほうが相応しい」と評して、「山や水が正しく位置すれば、身の近くに悪人がなくなる」と説いた。更に、彼女は「風水を改善する人間は人間関係を改善する意欲もある」と風水実践の意義を論じた。

### 事例四 青島福彩ビル

青島福彩ビルは市南区に位する高層ビルである。風水に興味のある27階に住んだ50代のS2さんをインタビューした。元看護婦である彼女は住宅の中に数多くの縁起物を設置した。例えば、寝室に百福図があり、応接間に八卦鏡や風水字画を掛けている。

彼女は自分の八字が柔らかいと言った。八字の柔らかい為、霊異事件は度々経験していた。彼女の話によると、幼い頃姉とともに男性の幽霊に尾行され、隣人の家で身を隠した経歴があり、その際同行した姉は悪

霊に取り憑き、高熱で夭折された事情が何十年を亘っても覚えている。そして、仕事のことで、死者の幽霊も頻りに見かけたと言った。例として、彼女はある重体患者が同室に住んでいた死者に呼びかけられ、冥界の話の喋りながら世を去ったことを教えてくれた。

S2さんは「人生は旅のようなものなので、平安が一番大切なことだ」と評した。「七上八下」（七は向上、八は下落）を信じる彼女は27が28を優れたとされ、27階のアパートを選択した。反例として、28階にそんでいた福彩センターの主任が経済問題で逮捕された。

更に、彼女は「頭の三尺上に神様がいる」と信じられた。風水だけでなく、仏教も信仰して、時折湛山寺のボランティア活動（饅頭作り等）に参加している。彼女は入口の近くに仏像（観音像）を設置して、正月と旅たつに際し、必ず仏像を浴びてあげると教えた。



図4 福彩ビル

### 事例五 湛山寺

湛山寺は青島地区における有名な仏寺である。山に寄り添い海に臨む「風水宝地」に座り、信者も数多くいる。特に正月になると、除夜の鐘を鳴らしたい信者たちは、四方八方から参り、何百メートルの列を並んでいた。

然し乍ら、湛山寺は救世を供養する仏寺として、風水に関係がないはずだが、境内の看板に風水との相互関係について、「…仏教の立場からみれば、風水、地理はそれぞれの道理があるが、決まった通りではない。古来から祖師たちは高い山や険しい峰で森林を切り開き、真理の道を求め、山を名山にした…彼たちは風水や地理の知識がないが、地理を往々に変えさせ、手を加えず自然の変化をもたらした」と認められた。



図5 湛山寺の看板

寺に入門したMさん（和尚）によると、境内に風水理論が身につけた者がおるが、当節は風水見が寺に禁じられた。そして、今日において、仏教、道教、儒教という三つの宗教が既に一致したと彼に教えてくれた。

#### 事例六 税関ビルをめぐる説話

（青島市）税関ビル事件が地元の有名な風水説話として、数多くの地元住民に知られていた。税関ビルは市南区に位する白い枠のある青い高層ビルである。和らげる海に隣接して、綺麗な高級レストランに面している。殺気を鎮めるため、ビルの庭に狛犬の石像が設置されたという。



図6 税関ビル

然し乍ら、税関ビルが運営してから、歴任の関長（税関の長官）が次々と不祥事に見舞われた。元を正すため、税関は香港の風水先生を雇い、風水見をさせてくれた。風水先生は税関ビルの直前にある半球体の高級レストランが墳墓と見なし、直方体の税関ビルを墳墓の墓碑とされた。墳墓と墓地の組み合わせが殺気（災い）を招ぎ、不幸に導いたと判明して、庭に置いた狛

犬像も陸生動物のため、海洋から遣ってきた殺気に効かないと判断した。新任の関長は風水を改善するため、石造の亀と嶗山の石を税関ビルの周囲に設置した。その後、高級レストランが倒産になり、税関の不祥事も消えた。

### 2.3 まとめ

青島市で実施した調査は現代生活に風水要素の存在が裏付けられた。不幸に関わる説話にしても、幸せを求める縁起物にしても、風水は「除災招福」の手段として地元の住民達に実践されている状況は確かだと考える。他の信仰との曖昧な習合、例えば仏教の観音像、道教の鍾馗像は風水改善に用いられるにもかかわらず、風水理論は信頼されている。

## 3. 考察

「風水説」は独特な構造のある理論として、決まった応用範囲や改善手法がある。他の信仰や理論、例えば、道教・仏教・面相等も其々の手段があり、異なる分野で効かれているはずだが、実地調査で見られた状況は異なった結果が現れた。仏像・呪符（道教の魔除けの道具）・地球儀等風水に関係のないものが風水改善に使われただけでなく、風水師ではない者も風水見に従事している。つまり、風水という旗の下に見逃さない混乱があると考えられる。

### 3.1 混乱の要因について

今日の混乱状況は風水文化が自ずから変遷してきたのではなく、人為的な影響が顕著である。特に当時の政策や運動に波及された風水実践や理論伝承は今の（青島市）風水状況にも余波があり、住民達の改善策を揺るがすのである。この点について、三つの実情があると考えられる。

一つは依頼者は風水知識が欠けたと考える。風水説は二千年以上の歴史のある成熟な方法論であるため、程度が高い風水知識と長年の実践的経験がなければ正確な判断にならない。例えば、門と窓の寸法・引越の期日・葬儀の仕方・住宅の位置と方向などの項目において、其々の風水的基準があり、風水師の指示の下で行われることが一般である。然し乍ら、風水説は（中国）

建国初期の色々な運動に見舞われ、他の信仰、例えば仏教、道教、シャマニズム等と同様に迷信視され、禁じられた。風水師の伝承が断絶されただけでなく、民間レベルの風水慣習も衰微した。結果として、青島市における今日の風水状況は随意的な風水行為があまねく存在している。

もう一つは各信仰の境界線が曖昧である。法事は僧侶、魔除けは道士とシャーマン、風水見は風水師によって行われるはずだが、今日の青島市において、境界線を越えたことが多い。例えば、湛山寺の看板に載せた説明は仏教と風水の関連を認めるだけでなく、元院主も「風水見」をしていた。そして、風水物店に仏教の真言があり、仏具店に金蟾像が売られている景観も珍しくない。信仰は昔のように各自の領域で謹んで実行されたことから、依頼があればしてあげることに変容した。特に今回の実地調査において、調査協力者たちの人生と家族を守ってくれれば、出身を構わず一切採用する傾向が強いと感じられる。

更に、風水師に対する公的な認証がない。即ち風水師の従業資格と専門性の評定に関わる社会に認めた基準がない。今日の中国籍を持つ宗教者たちに対して、政府に認めた資格があり、資格のある者が宗教に従事する。そして、国家からの経済支援があり、宗教者向きの専門学校（仏学院等）もある。然し乍ら、風水は別の次元に分類された。文化や建築学と採られた風水理論は大学の課程になり、風水行為は自発的な民間活動になった。その結果、風水理論を独学して、中途半端な風水従業者が青島市の風水業界に圧倒的多数を占めた。

### 3.2 風水信仰の動機について

上述のように、今日の青島市における民間信仰は混乱があり、クロスオーバーなことが遍在している。されば風水を信じる人はそれを信用する動機何であろうか。この点について、四つの可能性があると考えられる。

一つ目は文化上の受容性、つまり文化的には風水が受け入れやすいとのことである。風水説の核心とされた「気」は中国文化に普く使われた概念である。例えば、カンフー小説によく言われた「気沈丹田」に、或

いは病である「中気不足」にも「気」という概念があった。万物は「気」に生まれたものだという素朴な自然哲学は漢代から中国の様々な領域染み込んでおり、風水理論に現れた「気」をめぐる説明も比較的簡単に受け入れられると考える。

二つ目は風水改善にもたらした利益は現代中国人の欲求と一緒にすることである。風水の求めた「福祿寿」は今日に至っても数多くの中国人に追求されており、風水改善の除いた「災禍」が時代が変わっても人に怯えている。確実的な手段で偶然を必然に転じる風水説は人の心を掴んだと言えよう。その結果、神様の偶然的な恵みより、風水改善のほうが実用性が高いと捉えた。三つ目は費用が低いと考える。全ての風水改善は住宅の構造に至るまで改修するわけではないことである。事例四で見られたように、安価で簡単に買い入れた風水物も風水改善にある程度の効きがあり、使用者の心を慰められる。そして、置物や植物のような風水改善は費用が低い為、余り効果がなくても、損にならないと考えられる。

四つ目は風水行為は政治的に安全である。風水説は宗教や民間信仰と違って、神様や精霊のような超自然的な存在や教会のような組織がないのである。素朴な自然認識等という未熟な要素があるが、実用性の高い方法論として、客観的な見解も少なくない。そして、風水理論を公的に応用された事例もある。つまり、風水は公的に黙認され、安心に実践できる方法論として、政治的な紛争を起こさないと考えられる。

### 参考文献

- 牧尾良海 1974 「朱子と風水思想」『智山学報』23.24 (0)、pp.361-377  
渡邊欣雄 2001 『風水の社会人類学』 風響社  
聶莉莉 韓敏 曾士才 西澤治彦 2000 『大地は生きている』 加藤文明社  
張翠萍、北原理雄 1998 「房総半島における「風水空間」の研究：『青島經』に基づいた解読の試み」『日本建築学会計画系論文集』63 (510)、pp.169-176

# 水俣と福島が出会うとき

## ——原発災害被災者等の水俣訪問ツアーによる

## アクションリサーチ——

人文社会科学研究所 地域政策科学専攻 地域政策コース1年  
石原 明子

### 1. はじめに

現在から約80年前である1932年、筆者が現在住む水俣市では、日本窒素肥料株式会社の工場でアセトアルデヒドの生産が開始された。その生産の過程で生まれてくる有機水銀化合物を含む工場排水が不知火海に放出され、その沿岸地域の動物や人々に影響が出始めたのは、戦前のことであったといわれる。のちに水俣病と名前がつくその有機水銀中毒の患者が最初に公式確認されたのが1956年であった。さらに、それから55年後の2011年、東日本大震災が発生し、それにより東京電力福島第一原発事故が起こった。

両地域で起こった苦難は、そこに生きる動物や人間にとっては代えがたい個別的な事象である。同時に、そこで起こった問題の種類や構造については、多くの共通点があることも、多くの先行研究等で指摘されてきた<sup>1</sup>。両地域で起こったことは大規模環境汚染それによる健康被害や健康リスクがあること、環境汚染の加害者は地域の基幹産業であった企業であったこと、そのことによって一つの地域の中に加害者と被害者が同居していること、加害企業のビジネスが国家政策によって支援されてきたこと、被害に対して金銭賠償がなされそのことによって地域の被害者の中に賠償対象になる者ならない者などの複雑な関係が生まれ分断につながったことなどである。

筆者は、2013年より、この問題構造に共通点も多いとされる両地域の交流による原発災害被災者支援プログラムを実施してきた。本プロジェクト研究で

は、東日本大震災から10年、水俣病公式確認から65年たった2021年において、両地域の人々が交流することに、どのような意義があるのかをアクションリサーチによって探索することを目指した。具体的には、原発災害の被災者や被災地域に住む方々を対象に、水俣訪問ツアーを計画・実施し評価することによるアクションリサーチ・プロジェクトを実施した。

#### 表1 地域や家庭での人間関係上の葛藤と分析

- 1) 家庭：母親 VS 父親 / おじいさん、おばあさん
- 2) 避難した人としない人との間での絶縁（「避難した人は裏切り者!!」）
- 3) 農家と子どもを持つお母さん（敵は目の前にいた!）
- 4) お金をもらった人ともらえない人・補償の対象になる人・ならない人
- 5) 学校でのいじめ
- 6) 放射能を心配する人・しない人（することに疲れた人）、マスクをするか、学校水泳に参加するか、九州から野菜を取り寄せるか

#### 本当の敵はあなたの隣のひとですか？

### 2. プロジェクトの背景と目的

#### 2-1. 今回のプロジェクトの背景となる過去の取り組み

筆者は、今回のプロジェクト研究で報告する「原発災害被災者等の水俣訪問ツアーによるアクションリサーチ」（2020年10月30日から11月1日に実施）に先立ち、2013年以降、専門分野である紛争解決学の理論に基づき、原発災害後に起こった被災者間の人間関係葛藤の変容支援のプログラムとして、「原発災害

<sup>1</sup> 永松 (2012)、石原 (2013)、花田・中地 (2015)、除本 (2016) など

被災者のための水俣訪問プログラム」を実施してきた<sup>2</sup>。

原発災害後には、被災者の間では、多くの人間関係葛藤（コンフリクト）が起こった。例えば、表1のような人間関係葛藤と分断である。これらに対して、紛争解決学の知見を用いて、コンフリクトが発生するメカニズムの分析、そのメカニズムに応じた変容理論の選択、その変容理論をローカルな文脈に適用してのプログラムの開発を行い、実施してきた<sup>3</sup>。

コンフリクトの発生のメカニズムとしては、①大災害でコミュニティのすべての人が傷ついたことによるコンフリクトの発生、②コンフリクトの利害関係者間の加害被害関係、③コンフリクトの利害関係者間の力関係の差（構造的暴力）に注目し、それに対応して「傷ついた社会からの修復的再生モデル」「力関係の差がある場合のコンフリクト変容モデル（アダムカールモデル）」をコンフリクトの変容モデルとして注目した。その二つのモデルをローカルな文脈で実現するモデルとして「水俣と福島が会う」「原発災害被災者のための水俣訪問プログラム」を実施してきた。

## 2-2. 過去の取り組みにおいて用いたモデル

### (1) 傷ついた社会からの修復的再生モデル

本モデルが対象とするコンフリクトメカニズムは、「①大災害でコミュニティのすべての人が傷ついたことによるコンフリクトの発生」「②コンフリクトの利害関係者間の加害被害関係」の2点である。過去のトラウマ心理の研究では、大災害や暴力といったトラウマとなる事象（傷つく事象）によって、その被災者（被害者）は、図1の青線のような心理サイクルをたどると指摘されている<sup>4</sup>。トラウマ（傷つき）はその回復の過程で怒りを生み出し、怒りが他者に向かって行動化されれば他者への攻撃（アクトアウト）にもつながり、怒りが自分自身に向かえれば自分を傷つける行為（アクトイン）にもなりえる。すなわち、トラウマや傷つきがコンフリクトを生み出すと指摘

されてきている。コンフリクトが起これば、またそれによって傷つく人が出て、次のアクトアウト、アクトインが起こり、コンフリクトが生み出されて行く。このようにトラウマや傷つきが、コンフリクトや暴力の連鎖を生み出すメカニズムが指摘されている。

そこから脱するためのモデルが、図1の薄いグレーの矢印（一番左側の矢印）のプロセスである。悲しみや怒りをしっかり感じきる場があること（グリーンケア）、その後、経験を分かち合いコンフリクトの根本原因に気づき、その根本原因を解決していくために自らの新しいアイデンティティを見出していくことなどが、自らの心を修復し、ことを正しながらも、敵と思われていた人との関係を修復していくためのモデルとして示されている。コンフリクトの根本原因への気づきとその解決のためにアイデンティティを規定するプロセスは、修復的正義<sup>5</sup>のモデルとも呼ばれる。

図1 傷ついた社会からの修復的再生モデル図



Yoder(2005)を原発災害に合わせて改変（石原（2012））

### (2) 非対称コンフリクト変容のモデル（アダムカールモデル）

本モデルが対象とするのは、「③コンフリクトの利害関係者間の力関係の差（構造的暴力）」というコンフリクトメカニズム（特性）である。上記の「経験を分かち合い、根本原因に気づく」というプロセスは、典型的には、コンフリクトをもつ者同士による対話などが想定されるが、この当事者間で力関係があ

<sup>2</sup> 石原明子 (2018)

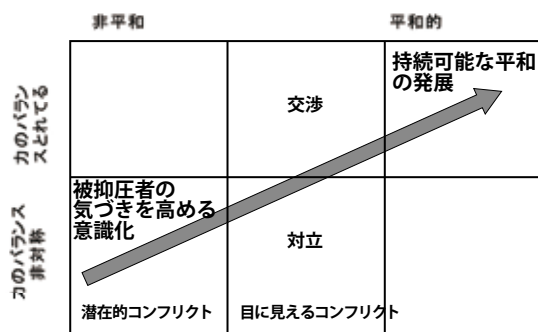
<sup>3</sup> 紛争変容の支援方法の理論については、石原明子 (2014,2018) など

<sup>4</sup> 図1は、筆者が Yoder(2005) のモデルを元に、原発災害のコンテクストに合わせて改変したものである (Ishihara (2012) , 石原他 (2012))

<sup>5</sup> 修復的正義自体については Zehr(2002)。それをトラウマとの関連で示したのが Yoder(2005)

る場合には、力のある方の当事者はコンフリクトに向き合うことを回避する傾向があり、またその中で、抑圧されている側（力が弱い側）は自らの被害や痛みや声を出す権利を認識する機会され奪われることもある。

そのため、当事者間の力関係の差がある場合には、抑圧されている側（力のない方）が自らの被害や痛みや声を出す権利を認識することを最初に支援し、彼らが声を上げ始めて初めて、力のある方の当事者が対話のテーブルにつくようになる、というモデルが図2の非対称コンフリクト変容モデル（アダムカールモデル）<sup>6</sup>である。



出典Ramsbotham et.al (2011)、このモデルはCurle 1971

図2 非対称コンフリクト変容モデル（アダムカールモデル）

### 2-3. 過去に行った「原発災害被災者のための水俣訪問プログラム」

上記の2つのコンフリクト変容モデルをローカルな文脈で実現するためのプログラムとして、筆者は「原発災害被災者のための水俣訪問プログラム」を開発し、実施した(2013年以降)。水俣訪問プログラムにした理由は、1) 水俣は、筆者が住む地域であり、筆者の当事者性として筆者の住む足元から原発災害被災者と関わりたかったことと、また、2) 水俣が、水俣病公害事件とそこからの再生のプロセスの中で前にふれた「修復的正義」の文化を成熟させてきている<sup>7</sup>地域であること、3) 水俣が地域として抱えた

<sup>6</sup> Curle,Adam は1971年にこのモデルを示した。筆者が直接参考にした出典は Ramsbotham et.al (2011)。筆者は、このモデルを原発事故や水俣病公害の文脈で提示した（石原(2013)）

<sup>7</sup> 水俣における「修復的正義」の文化の成熟例は、緒方(2003)や西山正啓監督ドキュメンタリー作品『のさり—杉本栄子の遺言』など。

人間関係葛藤課題と原発事故被災者の抱える葛藤課題が類似している、と考えたからである。すなわち、類似する地域課題をもち、修復的正義の文化を成熟させてきた水俣に、人間関係葛藤に苦しむ原発災害被災者を招へいし、そこで、上記の(1) 修復的再生モデルのピンクのプロセスと、(2) のアダムカールによる意識化・教育啓蒙のプロセスを実現することを意図した(表2)。

実施の結果、水俣病公害被害者が「類似課題の先行地域に生きる大人としてとしての責任と感じる」と原発災害被災者の若者に涙ながらに謝罪をし、その謝罪が原発災害被災者の若者の心にも響き、参加者全員が深く涙するなどの、強く響き合う出会いが生まれた<sup>8</sup>。その後、その参加者の中から、自主的に水俣と福島の交流を企画したり、水俣のことを福島で伝えるプログラムが企画されたりと交流が展開されていった。

そのような過去の経緯の中で、今回の2021年の原発災害被災者のための水俣訪問ツアーのアクションリサーチを実施した。

表2 原発災害被災者の水俣訪問プログラムのセオリーオブチェンジ

〈セオリーオブチェンジ（キーパーソンアプローチ）〉
1) 構造的暴力への気づき：福島の方々が、水俣との出会いを通じて、福島の構造的暴力の状況について少し距離を置いて、かつ深く考える機会を作る。 2) 福島の人々が修復的正義の文化（和解と正義の文化）を水俣から学ぶ：水俣の修復的リーダー・和解と正義のリーダーと出会うことで、福島の人々に、精神的・知的・霊的な変化がもたらされる。
〈二次的目的〉
3) 福島内部での分断の変容あるいはネットワークワーキング：福島の地域内で分断を抱える人々が、ともに修復的正義（的な）哲学にふれることで、その関係性に変容が起こる。 4) 福島在住者と、熊本避難者、熊本支援者、熊本の一般市民の関係性の変容 5) 水俣と福島の継続的な共に歩む関係

<sup>8</sup> 石原(2018)

### 3. 2021年の原子力災害被災者等の水俣訪問ツアーによるアクションリサーチ

#### 3-1. アクションリサーチの目的

2013年から2014年の「原発災害被災者のための水俣訪問プログラム」では、上記の理論に基づいたプログラムで「両地域の魂の響き合い」ともいえる出会いが生まれてきたが、原発災害から10年たった2021年において、両地域の出会い、具体的には、福島の人々の水俣訪問ツアーにはどのような意義と可能性があるのか、あるいは響き合う条件は2013年ごろと変化をしているのかをアクションリサーチによって探索したいと考えた。

#### 3-1. 実施した訪問ツアーの概要

##### (1) ツアーの経緯

本ツアーは、純粋に上記の研究のための実施ツアーではない。もともとは、筆者が東日本大震災以降に関わってきた福島県いわき市を中心とした市民の対話活動団体「未来会議」<sup>9</sup>を水俣に招聘をして、①彼らのための水俣学習ツアーと、②水俣での「未来会議（市民対話）」を実施したいという計画をもっていた。コロナ禍を縫っての実実施計画を調整する中で、②は大人数での直接対話であり感染リスクも高めるため、①のみを実施することとなった。参加者は「未来会議」の中で希望者を募り、計画した。またコロナ禍をぬっての水俣訪問ツアーは貴重な機会となるので、未来会議のメンバー以外に、原発災害当事者・関係者でありながらも未来会議のメンバーとは属性(立場)の異なる人々数名に、筆者の任意で声掛けして実施した。実施していただいた方には、訪問の様子が研究のために記録されること、訪問ツアー体験後に研究のためのウェブ調査やインタビュー調査にお応えいただきたい(ただし断ることも可能)ということ、事前に知らせたうえで参加をいただいた。

##### (2) 参加者

参加者は、スタッフをのぞくと、下記の8名であった。

##### ①未来会議(いわき市を中心とする対話グループ)5名

<sup>9</sup> 団体の活動については、未来会議ウェブサイト <http://miraikaigi.org/> (2022年2月9日閲覧)を参照のこと

うち3名は2013年ツアーの参加者、2名は初めて水俣に来る参加者 5名のうち2名は、都合により、ツアー2日目の10月31日から参加した。

- ②原発災害避難者(南相馬市→京都府綾部市) 1名
- ③福島市在住 ジャーナリスト(福島県外から福島市へ2年以内に移住) 1名
- ④東京在住弁護士(福島の津島訴訟弁護団、熊本大学大学院院生(紛争解決学)) 1名

##### (3) 予算

科学研究費補助金(基盤B)「分断された地域コミュニティの「対立・葛藤変容」に向けた分析とプログラムの提示」(研究代表者:石原明子、2019年度~2024年度)から、こちらから招へいた参加者(①②)には旅費の一部あるいは全額を支給した。

##### (4) 水俣訪問ツアーの概要

水俣訪問ツアーは、2021年10月30日(土)から11月1日(祝)の3日間で実施をした。8名中2名は10月31日(日)からの参加、別の1名は10月30日(土)から10月31日(日)までの参加であった。3日間の各日のテーマは下記のとおりである。

- 第1日目:水俣病公害事件の概要を知る(構造的暴力の歴史的史実を含め)企業や国家に批判的な立場の方々の話を聞く
- 第2日目:修復的正義ともやい直しへ  
患者の中でも赦し(修復的正義的な赦し)のリーダーの話を聞く  
もやい直し<sup>10</sup>を含め、水俣の地域再生のリーダーの話を聞く  
水俣の若い世代を含めて相互交流をする
- 第3日目:すべてを超越した在野哲学者と出会う(緒方正人氏との出会い)

3日間のプログラムの詳細は以下のとおりである。

<sup>10</sup> もやい直しとは、一般に、水俣地域において1990年代以降に取り組まれた分断した地域の人間関係を再構築しようとする取り組みを指すことが多い。「もやい直し」の言葉が最初に公的な場で用いられたのは、1994年の水俣病犠牲者慰霊式において吉井正澄市長(当時)が市長としての初めての公式謝罪を行ったときに、「今日の日を市民皆が心を寄せ合う「もやい直し」の始まりの人いたします」と述べたことにあり、吉井正澄市政下での水俣地域の人間関係再構築の取り組みを指す人もいる。



## 水俣訪問ツアープログラム

	10月30日(土)	10月31日(日)	11月1日(月)
9時	プレツアー：山から見る水俣 (吉本哲郎氏とめぐる)	●相思社 考証館見学 (相思社 木下氏)	●緒方正人氏 訪問
10時			
11時	<以下 本プログラム> ●水俣の街めぐり (主に水俣病の史跡をめぐる) 環不知火プランニング代表理事森山亜矢子氏 (サポート：からたち 大澤菜穂子氏)	●杉本肇氏 講話 (水俣市立水俣病資料館語り部・漁師) 杉本氏による不知火海スペシャルランチ 杉本氏とめぐる海から見る水俣 (船に乗る)	●つなぎ美術館のユージーン・アイリーン・スミス企画展など 訪問 他
12時			
13時			
14時	●水俣市立水俣病資料館 (吉永利夫氏ご案内)	●愛林館訪問 (10分)	
15時	●明神地区案内	●吉井正澄氏 訪問 水俣の地域再生ともやい直し (元市長として)	解散
16時	●吉永理巳子氏 講話 (水俣市立水俣病資料館語り部)、吉永利夫氏 講話 (元相思社職員、現ミナコレ)	●吉本哲郎氏 訪問 (元市職員として)	
17時			
18時	●川本愛一郎氏 講話 (水俣市立水俣病資料館語り部)	●水俣住民と参加者の交流会	
19時			
20時	●水俣の山の温泉でゆっくり		
21時			

### 3-3. 訪問ツアーの意義等の検討方法

訪問ツアーの意義 (参加者へのインパクト) やどのような「響き合い」「響き合わなさ (齟齬やコンフリクト)」が起こるのかについての調査と検討方法は以下のとおりである。ただし、プロジェクト研究の期間では、調査対象者の都合もあり、(2)までの実施となった。この報告書では、(2)までの結果を踏まえて報告をする。

(1) 記録と参与観察：参加者のインフォームドコンセントを取ったうえで、学習ツアーのプロセスをビデオ等で記録し、研究者はツアーにおける参与観察を行う (2021年10月30日～2021年11月1日に実施)

(2) ウェブ質問紙調査：福島からの参加者に、水俣ツアーに参加期待したことや、福島に関する課題意識、水俣に来て課題意識についてヒントになったのか、水俣との出会いでどのようなことが印象に残ったのかといったことを、ウェブ質問紙で記入していただく。

—質問調査のデザイン (2021年11月4日～11月10日)

—質問調査への記入依頼と記入期間 (2021年11月

11日～12月14日)

(3) ウェブ調査の回答について、ディープ・インタビュー調査を行う。

(4) 3の結果から「福島」の方々が原発事故に向き合う上で、「水俣」の経験や「水俣」との出会いがどのような意義をもちえるのかを分析する。

### ウェブ質問紙調査「水俣ツアー (2021年10月30日から11月1日アンケート)」

Q1. 回答者名

Q2. 水俣のどのようなことに関心があって参加されましたか？ 水俣に来ることにどのような期待があって参加されましたか？ 6件の回答

Q3. 現在、震災・原発災害によるご自身やご自身の地域や社会の過去・現在・未来のことで、どのような課題や葛藤、問題意識を感じておられますか？

Q4. 上記で書かれた課題や葛藤や問題意識に関して、今回水俣にこられたことで、何か参考になっ

たこと（知識面、精神面、アイデア、その他なんでも）はありますか？ それはどのようなことですか？ プラス面での参考でも、マイナス面での参考でも構いません。

Q5. 今回の水俣ツアーで「印象に残った言葉」「印象に残ったこと」をお教えてください。可能でしたら、各セッションごとにお教えいただければ幸いです（これも、プラス面でもマイナス面でも構いません）。これは別紙（Facebookの投稿や、当日のメモの写しの形）でご提供いただいても大丈夫です

Q6. 水俣に今回来て、一番良かったことは何ですか？

Q7. 今後、水俣と福島（福島県外被災者や避難者も含めた原子力災害被災地・被災者）が今後も交流していくとしたら、どのような形やどのような内容でやっていくと意味があると思われるでしょうか？

Q8. 今回、水俣に来たことをきっかけに、今後やってみたいなと感じたことはありますか？ あればお教えてください。

## 4. アクション・リサーチの結果

### 4-1. ウェブ調査結果

ウェブ調査では、プロジェクト研究終了時までに8名中6名からの回答を得られていた。ここでは6名の回答を元に結果を示す。

#### (1) 訪問ツアーへの参加動機 (Q2)

① ヒントを得たい（6名中5名が「ヒントを得たい」に類することを動機としてあげた）

—福島県浜通りで起こっていること（現在、未来）に対するヒントを得たい

—人生で不条理なつらい出来事を経験した人が生きていくためのヒント

—処理水放出の問題も議論になっている中、海の汚染を経験した水俣からヒントを得たい

—10年の福島に対して、10年目やその後を経験している水俣の姿を見比べたい

—暗いイメージのある水俣の今はどうか

—汚染された海とそこで営みを途切らせる事なく暮らした住民、国への責任追求姿勢、国・企業による止まない被害当事者虐待の構図の共通性、住民の対立と無関心について

② 前に感動したので再訪したかった、尊敬する語り部の船に乗りたかった（6名中1名）

#### (2) 福島での課題意識は何か、課題意識を考えていくうえで、水俣訪問は役だったか (Q3,4)

6名の方の課題意識は、「進む物理的復興と置き去りにされて行く重い」「住民民主主義」「対話」「風評被害」「不条理への向き合い方」など、多様なものであったがここでは、3名の方の課題意識と水俣訪問ツアーが役に立ったかについての回答を掲載する。ウェブ回答だけでは意味が取りにくい部分については、回答者と調査者のこれまでの対話や補足的な対話から、その意味を筆者が解釈して紹介する。

①参加者 Aさん

○福島での課題意識：物理的な復興が進む中で、置き去りにしていく・されていく重い思い

「暮らし」と呼ばれるものが、どの町にも芽生えはじめ、それは、喜ばしいことでもあると思う反面、国や行政の意図やスピードの速さの中で、置き去りにされてゆく思いもあるように感じている。新しく入ってくる人たちと、10年間闇雲に走ってきた人たちの、歴然とした空気感の違い。（問題や悲しみ等に言及し続けることを）「重い」という一言の暴力性に、現在はどう立ち向かえるのかと悩んでいる。（ ）内は、筆者による補足。

○水俣ツアーが役だったか

水俣では「重さ」を引き受け続けている人たちがいた。60年経ってもなお、語りながら声を震わせてしまうということ。そこに、自分の姿を見た気がした。それぞれに考え方は違っていても、同じように踏ん張っている人がいると感ぜられることが、互いの勇気になっていったのではないかな。自分にはそういう相手がいるだろうか。わからなくなっている。だから水俣に来たのかもしれない。課題図書としていただいた「チツツは私であった」は、本

の中に友人を見つけた気がした。本はもちろんのこと、本人にも出会わせていただいたことに感謝しかない。

## ②参加者 B さん

○福島での課題意識：国家規模の課題（原発）で、影響を地域における住民自治の方法（政策等決定において、対話による直接民主主義的アプローチは可能か？）

住民自治ということと、その影響が広範に及ぶ時の民主主義の考え方。

権力に対してや、構造的な社会の仕組みに抗いたいときに、権力側と似たようなマクロな視点からの行動（※）になりがちで、それぞれが極にいながら同じことをしているのではないか。（※ここで、マクロな視点からの行動とは、筆者と B さんのこれまでのやりとりから意味を補足すると「構造改革や政策変革を求める批判的抵抗運動」を指していると考えられる。批判ではなく、権力との対話の積み重ね（相互理解の醸成等）に可能性はないのか。構造的な社会に仕組みが問題なときに、対話の積み重ねによって仕組みを変えて行ける可能性はないのか、という課題意識）

## ○水俣ツアーが役だったか

マクロの積み重ねが重要と再確認したが、もやもやしている。当事者性の強さは、体験の濃淡の差が大きく影響し、その体験を背景にした言葉の重みと、体験はなくとも関わろう考えようとする人の心の動きとが、混ざり合っていくことが大事なのかなと思った。

## ③参加者 C さん

○福島での課題意識：①不条理な人生への向き合い方、②地域内で「分断ではなく対話」とは具体的にどのようにするのか。

人生で不条理なつらい出来事を経験した人がどのように生きていけるのか。福島県という地域単位では「分断ではなく対話を」などとよく言われますが、実際にはどのように進めていけばいいのか。日本社会全体としては、原発事故への真摯な反省がまずは必要と考えている。

## ○役だったか

第一の項目については、吉永理巳子さんや杉本肇さんのお話から、自分なりに考えてみてはいますが、なかなか難しいです。第二の項目については、吉井元市長や吉本哲郎さん、吉永利夫さんのお話（もやい直しの経緯）にヒントがあった。

## (3) 水俣で出会った印象に残った言葉・印象に残ったこと (Q5)

本項目についてのウェブ質問調査の回答からは、下記のような言葉や事柄が挙げられた。これらの言葉や事柄が、参加者にとってどのような意味を持ったのかについては、引き続きインタビュー調査をする予定である。

### ①緒方正人さんの言葉

「私たちは命の迷子になっている」「土地への愛着。養ってもらった故郷。生命存在としての関係性」「闘うべき敵は誰なのか。巨額の金が絡み出すと対象の特定をしにくくされる」「銭で歪められてきた本質。本質はなんなのか。相手が見えなくなっていく」「生物のほとんどが無限大に巻き込まれていく」

### ②川本愛一郎さんの言葉

「当事者たれ」「人は幸せになる為に生まれてきたはずだ」「うして(見放された)水俣病」「初めて人を信じられるようになった(10代の愛一郎さん)」

### ③杉本肇さん

「患者だった親から、チツソへの憎しみが伝わって来なかった」「母は、[チツソは恨まん]と言っていた」「恨まれても恨み返すな、差別されてもし返すな」

### ④吉永理巳子さん

「50年経てば水俣病は消えるんじゃないか」

### ⑤吉本哲郎さん

「もやい直し」「対立が在るのではなく対立を作る存在が在る」「自治は自分育て」「愚痴から自治へ、愚痴から知恵へ」「人は感動で動く」「逆境の中で笑えるようになった人は乗り越えて行ける」「あきらめろ、覚悟せよ、本物を作れ」

## 4-2. ツアーへの参与観察から 印象的であった場面

### (1) 響き合う場面

参加者が、水俣の講話者の話を聞いて、心に響き、涙しながら語る場面がいくつか見られた。ここではその一つを紹介する。

被害当事者であり未認定患者リーダーだった川本輝夫さんの長男川本愛一郎さんが、その講話において、子供の頃には警察が運動家の父を取り調べるために家宅捜索し、警察が自分の「子ども机」までも踏み荒らししていく様子をテレビで見たりという壮絶な子供時代を送りながらも、人や社会を信頼できている大人として今生きていると話したのを受けて、原発事故について裁判を提訴している参加者Dさんが、涙ながらにコメントを述べられたシーンがあった(下記)。

今日あなたに会えてよかった。私は子どもを育てるうえで、子どもに明るくまっすぐ育ってほしいと思い、この社会や世界は信頼できるとよい面をたくさん見せてあげたかった。しかし一方で、私は原発事故の件で裁判をしたりして、そこに娘たちを帯同することで、社会のひどい面や信頼できない面ばかりを見せてきてしまい、娘たちがまっすぐ育たないのではないかと不安で、親としてこれでよかったのか悩んできた。でもあなたが、運動されるお父さんの背中をみながら、こんなにもまっすぐに世間を信じて今このようにあられるということを見ることができて、本当に良かった…(参加者Dさんの発言の趣旨を筆者が再構成)

### 2) コンフリクトの場面—実害か風評被害かをめぐって

ツアーで水俣の患者支援運動をしてきたEさんと患者遺族による講話中に、参加者Fと水俣のEさんの中でコンフリクトが起こった。Eさんとその妻の患者遺族は、水俣において、発症した水俣病患者が、認定をなかなかしてもらえなかったり、差別されたりという点で厳しい経験をしてきたことを語っていた。また差別の構造を語る中で、水俣にはタブーが多いということを語っていた。

水俣の患者支援運動Eさん：あなたたちの考えていることはだいたい想像がつくし信頼しているから水俣のタブーも話すけど…

参加者F：私たちの考えていることはわかるって、何がわかるっていうんですか！ 私は、[あなたたちは水俣病の病気が発症してからのことを福島も同じだというような前提で話していますが(筆者補足)] 例えば処理水の放出で健康や環境への影響はない、という自分で調べて考えた結果思っていて、風評被害による漁業への影響を心配しているだけなんですよ。

患者支援運動Eさん：俺は風評被害って言葉は嫌いだね。健康や環境への影響がないっていうなら、福島には被害はありませんでした、って単純に言えばいいだろう。風評被害があるなんていわないで。

———

他の参加者G、H：(のちに別の場所で)今は意見が同じような人々同士で集うことの方が多く、「汚染水で、健康や環境への影響はない」とあそこまで言い切っている人には、なかなか普段は表立って会えない。ここ(水俣)に来たからこそ違う立場の人とも会えるのだねえ(各人の発言の趣旨に基づいて筆者が再構成)

## 5. 考察

### 5-1.2021年においても「水俣と福島が会う」意義はあるのか

このことを本当に検証するためには、今回結果を紹介したウェブ質問紙調査の結果をもとに、より深いインタビュー調査を行い、水俣への訪問そしてそこでの出会いが、彼らにとってどのような意義をもったのかを詳しく聞き取らねば、本当の意味で検証はできないと考える。

しかし、筆者が共に3日間のツアーを過ごした参与観察から、また参加後のインフォーマルなコミュニケーションからは、参加者から大きな熱量をもって「水俣が好きになった」「行って本当によかった」「出会えてよかった」とのフィードバックを得た。

「行ってよかった」「出会えたよかった」ということのポイントがどこにあるかを考えるために、ウェブ調査では、今回のツアー参加の期待(Q2)、参加者の福島や原発事故に関する課題意識(Q3)を聞き、

それに今回の訪問が役に立ったのか (Q4) を聞いた。ほとんどすべての人が何らかの「ヒント」を水俣に求めており、その課題意識 (Q3) は多様であることがわかった。復興によって取り残される重たい想い、原発という国家的課題と産業の被害地域が自らの地域に降りかかる意思決定に対してどのように住民がかかわれるか・直接民主主義的な対話によるアプローチは可能か、理不尽への向き合い方、分断への向き合い方など多様であった。それへの「ヒント」が水俣ツアーで得られたかどうかは、人それぞれであるように見えた。

しかしその具体的な課題の解決へのヒント以上に、その具体的な課題に向き合っていくための精神的なエンパワメントが水俣でなされていたように思えた。それは、このツアーの中で流された幾重もの共感・響き合いの涙、ツアー後の参加者の表情やフィードバックのエネルギーから感じられた。それは、印象に残った「言葉」「出来事」を掘り下げていくとより明確になるのかもしれない。すぐに解決をもたらすわけではないが、そこにヒントになったり、力づけられたりする言葉や哲学や思い (vision) と出会える、ということのように感じられた。水俣側も「(福島の方々と) 共にある」という意志と姿勢を見せており、それが参加者に伝わったと感じられる。

#### 5-2.2013年・2014年ツアーとの大きな違い

4-2 (2) のコンフリクトの場面にも関係しているが、筆者が、参与観察による全体を通じた雰囲気として2021年の交流が2013年・2014年の交流と大きく違うと感じたのは、水俣病の発症や患者の物語に関する福島からの参加者の受け止め方である。2013年・2014年には、福島の方々は、水俣病の発症や患者の物語を聞くと、福島でも水俣のように病気の人や障害をもって生まれる子供が多く出て、その道は大変苦難に満ちたものなのだと、自分たちの未来としてイメージして聞いておられたことを感じたのに対して、2021年のツアーでは、特に浜通り (いわき市周辺) の参加者は、放射性物質による汚染での病は福島で発症しなかった (していない) のでそこは水俣とは違う、という気持ちで聞いておられることを感じたことであった。しかし一方で、原発事故で避難を決意して続けて

いる人たちが福島に在住していても政府の発表に批判的な視点で見ている人たちは、福島での健康被害は実は起こっているか起ころうとしているが隠されていて、水俣病において最初の9年事実が隠され続けたことと今の福島が重なるという気持ちで聞く人もいた。

これについては、原発事故から10年たって、健康被害について公的なデータが重ねられ、明らかな原発事故の健康被害は出ていないという立場を行政がとっている中<sup>11</sup>で、原発事故から2,3年後でその後の健康被害の程度が読めなかった2013年2014年に比べると、原発事故に関する健康被害の認識が、それぞれの被災者や関係者の中で「安定」してきたことに原因があると考えられる。甲状腺がんなどが増えるには事故から5年以上データを見続けることが必要という中で、5年以上たった中、県民健康調査の結果をどのように解釈するかについては立場による違いがあるが、どの立場を自分は信じて生きていくのかという自分の信念に関する「安定」が出てきたと考えられる。福島で健康被害はない・ほとんどない、と政府の見解と近い立場をとる人、健康被害はある・これから出るが隠されていると、政府の見解には批判的な立場をとる人に分かれ、それらの立場の間であまり激しく議論がされたり、ちょっとした一言で互いに傷つけあったりということなくなってきたと、筆者が継続する原発事故被災地のフィールドワーク調査からも感じる<sup>12</sup>。

そして水俣との関係でいえば、健康被害が「水俣ではあったが、福島ではない」と考えるか「水俣で隠されたように、福島で隠されている」と考えるかによって、水俣病にまつわるストーリーに聞き方が異なってくる。この部分はより深い調査と考察が必要であるが、そのような古くて新しい分断が生じ始めている、しかも衝突の音はあまりせずに分断が生じていることを感じたツアーであった。

## 6. 本研究の現時点での限界と今後の展望

<sup>11</sup> 福島県立医科大学放射線放射線医学県民健康管理センター (2020, 2021)

<sup>12</sup> 筆者は、原発災害被災地そして被災者間で、立場の違う者の「すみ分け」ができ、立場の違いによる日常的な傷つけあいも、また違う立場同士での対話も減ってきていることを、原発災害被災地のフィールドワーク調査で感じている。

すでに述べた点も含め、本プロジェクトの研究としての限界点と今後の展望を述べる。限界点の第一は、コロナ禍で、長い間対面式の交流ツアーはできず、今回は流行の合間を縫っての少人数の実施となり、原発災害被災者や関係者の多様な立場の人にバランスよく参加していただくツアーではなかったことである。そのためこのツアーの参加者が、原発災害被災者を代表する声であるといいきるには人数が少なすぎるため、今後コロナ禍の様子を見ながら継続していきたいと考えている。

限界点の第二は、水俣訪問ツアーの意義の検証のためには、参加者へのインタビュー調査までを実施する予定であるが、このプロジェクト研究のまとめの時期までには、関係者の日程があわず、インタビュー調査まで実施できなかったことである。そのため、今回の発表では、ウェブ調査の回答と参与観察結果のみを分析対象とせざるを得なかった。そのためツアーの意義を真に検討するには十分なデータに基づき得なかった。今後インタビュー調査を実施して、分析を深めたいと考える。

今後の展望としては、上記に加えて、2021年含めてこれから10年の両地域の交流の意義を、紛争解決学の理論的視点から再構築していきたいとも考えている。また、この交流によって、水俣の人が何を語ったか（水俣の経験を、福島との関係でどのようにとらえて意義付けているか）を、取りまとめて、分析していくことにも意義があると思われる。

## 7. おわりに

今回の訪問ツアーも含めて、原発災害の被災者や関係者を対象とする水俣訪問ツアーは、私がデザインし実施したツアーに関しては、(今回のプロ研の報告書では描き切れなかったものの)参加者に大きなインパクト・希望を与えてきたように感じられる。多くの参加者は、地域の分断から「もやい直し」という地域の人間関係再構築に取り組んできた水俣をみて、そして被害者リーダーたちが苦難に向き合いながらも「赦す。赦すから共にこのような悲劇が二度とない社会を一緒に作ってほしい」と加害者や社会に働きかけるその水俣の精神性をみて、そこに「福島もいつかはそうなり

たい」「自分もいつかはその境地にいたりたい」と希望を持ったようである。

しかし、2013年のツアーに参加した後、“大好きになった水俣”に10回以上訪れてくれたある福島の方が言った。「自分もいつかは水俣の語り部たちのような境地になりたい、と思ってきたが、水俣を訪ねれば訪ねるほど、最初にみた美しい希望とは違う現実もあることに気づいた。水俣は水俣、福島は福島、その現実の中に、一步一步歩んでいく歩いていくしかない。共に」と。

水俣では、1990年代からの「もやい直し」によって、それまでは水俣病に触れることも語ることもタブーであったのに対し、水俣病について少しは語れるようになり、学校でも水俣病について教えられるようになった。一部の市民は、水俣病事件被害者（患者）の気持ちを理解し、触れあうようになった。しかし、2022年、私が住む水俣では、一定世代以上の少なからずの住民（特にもやい直し以前に水俣での学校教育を受けた世代、おおむね55歳以上）の中には、「患者や運動家が騒ぎ立てるせいで、水俣のイメージが悪くなった。患者や運動家は地域の敵である。水俣病は地域の敵である」という感覚が根強い。その裏には、市民自身が、水俣病公害の時代に、水俣以外の地域から「水俣地域出身者」というだけで水俣病の発症の有無と関係なく差別を受けてきたという深い傷つきと悲しみもある。本稿の図1のトラウマモデルにおける傷つきのエネルギーのアクトアウトとして、彼らは、チッソや国家ではなくて、患者や運動家を攻撃する。患者は病気や障害に加えて、地域からの無理解といわれなき“悪口”によって絶望に陥れられる。そして運動家は批判を強める。分断は深まる。2022年の水俣は、まさに、もやい直しの「揺り戻し」の時期にある<sup>13</sup>。

このツアーは何を見せているのかといえば、おそらく水俣に関する「幻」を見せているのだろう。しかし

<sup>13</sup> 水俣市の現高岡利治市長下の市政では、例えば、水俣市に1964年以降存在していた「公害環境対策特別委員会」の名称から「公害」という文字をなくし「環境対策特別委員会」とするなど、水俣市から水俣病公害に関する要素をなくそう（終わったこととしよう）とする方向が示され、実行されている。そのことをめぐる政治的社会的分断は深まり、もやい直し以前の時代のようにだと称する人も少なくない。高岡市長は2022年2月6日の水俣市市長選挙で再選を果たしたことからも、高岡市長に代表する考えを支持する勢力が水俣市民の中で一定数あることがわかる。

根拠のない「幻」ではない。水俣を生きてきた生々しい人たちが、生々しく語り示す「幻」である。しかし「幻なければ民滅ぶ」という言葉がある<sup>14</sup>。ここでの幻は英語では vision という言葉で訳されることが多い。幻もなく暗闇を進むのと、幻を確かに見ながら暗闇を進むのでは大きな違いがある。

今こそ、この幻を福島の人々共に、水俣の人々もみるべきなのだ。そして、その幻を消さないように、共に歩むときであろうように感じている。

## 参考文献

Ishihara, A., A. Keosavang, E. Malibiran, C. Stauffer(2012). Peace building through Restorative Dialogue and Consensus Building after the TEPCO Fukushima 1st Nuclear Reactor Disaster, Eubios Journal of Asian and International Bioethics 22 (3)

Ramsbotham, O. T. Woodhouse, Miall H(2011). Contemporary Conflict Resolution 3rd Edition. Polity

Yoder C.(2005). A Little Book of Trauma Healing, Goodbooks

Zehr, H., (2002). A Little Book of Restrative Justice, Goodbooks

石原明子、岩淵泰、広水乃生（2012）「震災対応と復興にかかる紛争解決学からの提言」『将来世代学の構想』（高橋隆雄（編）九州大学出版会

石原明子（2013）「東京電力福島第一原発災害下で起きている地域や家庭等での人間関係の分断や対立について—水俣病問題との比較と紛争解決学からの一考察—」熊本大学社会文化科学研究 11:1-20

石原明子（2014）「紛争変容・平和構築学の理論的枠組み：日本における実践家育成のために」『現代社会と紛争解決学：学際的理論と応用』（安川，文朗，石原，明子編）ナカニシヤ出版

石原明子（2018）「福島と水俣の交流を通じて」ユオードー vol. 2: 68-79

石原明子（2018）「対立や葛藤から未来への変化を生み出す—戦略的コンフリクト変容への招待」TASK MONTHLY514

緒方正人（2003）『チッソは私だった』葦書房

永松 俊雄（2012）『環境被害のガバナンス—水俣から福島へ』成文堂

花田昌宣、中地重晴（2015）『いのちをつなぐ～水俣、福島、東北～（水俣学ブックレットシリーズ13）』（熊本学園大学水俣学研究センター 編）熊本日日新聞社

福島県立医科大学放射線放射線医学県民健康管理センター（2020）『令和元年度版 福島県「県民健康調査」報告』 [https://fukushima-mimamori.jp/outline/uploads/report\\_r1.pdf](https://fukushima-mimamori.jp/outline/uploads/report_r1.pdf)（2022年2月9日閲覧）

福島県立医科大学放射線放射線医学県民健康管理センター（2021）『福島県「県民健康調査」報告書 2011-2020』 [http://kenko-kanri.jp/img/10yr\\_report\\_full.pdf](http://kenko-kanri.jp/img/10yr_report_full.pdf)（2022年2月9日閲覧）

除本理史（2016）『公害から福島を考える』岩波書店

## <参考映像資料>

西山正啓監督（2014年制作）『のさり—杉本栄子の遺言』

<sup>14</sup> 「幻なければ民滅ぶ」という言葉は聖書の言葉であり、この言葉を援用して、昆虫学者で国際基督教大学初代総長であった湯浅八郎は「幻なければ若者滅ぶ」という言葉で大学教員の理念を語った（湯浅（1981））。筆者のここでの「幻（vision）」への思いは、湯浅の解釈に近いところがある。





# 令和3年度プロジェクト研究概要

江 山  
(プロジェクト研究指導補佐)

## ●前年度プロジェクト研究の課題

令和2年度のプロジェクト研究報告会は初めてのオンライン開催になりました。参加人数は大幅に増えましたが（特に海外からの参加者）、新たな課題が浮上しました。ネット上の情報管理の問題でした。つまり、報告会のZoom情報の漏洩問題が発生し、少数の秩序を守らない参加者の参加により、Zoom会場に混乱が生じました。

今年は専攻の学生全体を対象に、情報管理やオンライン参加のルールを守ることを徹底するよう呼びかけしました。そのため、報告会の当日は去年のような混乱は生じませんでした。

## ●授業について

今年度のプロ研授業も例年どおり、共通テーマの検討から始まりました。今年度もコロナウイルスの影響で入学者数は少ないため、プロ研の発表者も2人のみでした。以前からプロ研の最大の難関の一つとして共通テーマを見出すことが挙げられます。例年と比べると、今年度の発表者は少ないため、共通テーマの検討はそこまで苦戦しないのではないかと思われましたが、そう簡単に決まりませんでした。

まず、コロナウイルスの影響により今年度の授業はすべてZoomによる遠隔授業になりました。それに伴い、夏季合宿も実現できず、院生室の一時使用禁止などもあり、院生同士の間の親和性を高める機会はありませんでした。コロナウイルスは社会の様々な面に影響を与え、共同研究をすることにも支障が生じました。また、発表者の1人は県外在住のため、発表者同士は連携を取ること

はさらに難しくなりました。

そして、今年度の発表者の専門は違い、1人は人類学で、1人は政治学でした。人数は少ないとは言え、研究手法、研究対象も異なるため、共通点を見出すことは困難でした。提案と議論が重なり、最終的に共通テーマ「環境・災禍と人間」が決まったのは12月中旬で、2人の発表者からの提案でした。しかし、このテーマだけでは内容がはっきりしないため、サブタイトルを追加した方がいいとの意見を受け、サブタイトルを追加することになりました。その後、萩野先生のアドバイスをもち、院生2、3年生は知恵を振り絞り、サブタイトルは「地域内外の視点から見る良い暮らしの創造」に決まりました。

今年度のプロジェクト研究の授業スケジュールは表1に示されている通りです。今年度の発表者は少なく、発表者の負担を減らし、新しい刺激を与えるために、担当教員と個別相談ができる「報告準備」の時間と2、3年生の研究発表の時間を設けました。2、3年生の研究発表の後、院生からの質問が多く見られました。違う専門分野の院生同士にとっては有意義な時間でした。

今年度のプロジェクト研究を通して、検討が必要な問題としては、院生同士の親交を深める機会がない点挙げられます。

先述のように、コロナウイルスの影響で院生同士、特に発表者の間に親交を深める機会はありませんでした。コロナの関係もありますが、発表者同士で積極的に交流しなかったのも言えます。しかし、共同研究をするための力を高めることもプロ研の目的の一つです。そのため、授業以外の時間でも研究について交流する必要があります。以前は対面で授業が行われ、授業が終わった後、発表者同士が残り、議論していました。現在

は Zoom による遠隔授業のため、発表者同士は自ら交流の時間を確保する必要があると考えられます。この点に関しては、今後の課題として検討しなければなりません。

**表1 令和3年度プロ研授業スケジュール (案)**

1	10/08	オリエンテーション
2	10/15	共同テーマ検討
3	10/22	報告準備
4	10/29	共同テーマ検討
5	11/5	研究計画発表 (2名)
6	11/19	進捗状況発表1回目 (2名)
7	11/26	二年生研究発表 (3名)
8	12/3	進捗状況発表2回目 (2名)
9	12/10	三年生研究発表 (1名)
10	12/17	報告準備
11	12/24	進捗状況発表3回目 (2名) 三年生研究発表 (1名)
12	1/7	研究結果発表1回目 (2名)
13	1/21	研究結果発表2回目 (2名)
14	1/28	リハーサル
15	1/29	報告会

## ●報告会について

今年度のプロジェクト研究報告会は表2で示したプログラムのとおり行われました。

地域政策科学専攻長の竹内先生による開会の辞で報告会が始まりました。その後、今年度のプロジェクト研究担当教員の平井先生が今回の共通テーマの趣旨を説明しました。

その後、夏さんによる発表が行われ、コメンテーターを担当した兼城先生から、夏さんに対しコメントが述べられました。休憩の後、石原さんによる発表が行われ、農中先生が石原さんに対しコメントしました。

最後に、今年度のプロジェクト研究担当教員の三木先生の司会により、コメンテーターと発表者を交えて、共通テーマをもとにしたディスカッションが行われ、人文社会科学研究科長の松田先生による閉会の辞を持って無事に報告会は閉会となりました。

## ●報告会の課題について

コロナウイルス感染症の影響で、今年度のプロジェクト研究報告会は、去年に続き Zoom によるオンライン開催の形で開催されました。学内外から30名ほどご参加いただきました。そして、発表者への質問、コメントをいただき、発表者にとっては、研究に関するとても貴重なアドバイスを得ることができた有意義な報告会になったと思います。

しかし、今年度のプロジェクト研究報告会を振り返ると、今後改善すべき課題があったと思います。

### ①共通テーマについての言及の不足

前述のように、今年のプロ研の共通テーマを決めるのに時間がかかり、サブタイトルを含めて最終的な決定は12月下旬になりました。そのため、1月に入り、発表者それぞれは自分の研究に専念しなければならなかったため、共通テーマとの関連性をしっかり検討する時間が十分に作れませんでした。その点は報告会でも鮮明になり、共通テーマについての言及はほとんどありませんでした。これは共通テーマを掲げた報告会としては達成できなかった部分であると思いました。今後は発表者に共通テーマについての議論の時間を十分に設ける必要があると思います。

### ②現在までの報告会周知方法の限界

以前から報告会の周知は主に専攻の教員にメールでお知らせしたり、学内でポスターの宣伝と学外の方にチラシを送る方法を取りました。しかし、一月に入り、鹿児島でもコロナの感染が急速に拡大し、授業はすべてオンラインに切り替わり、大学への入構も制限されました。そのため、特に学内でポスターを貼っても効果は限定的だと思いました。

今の時代に備えて、報告会自体もオンライン開催になっているため、報告会に関するオンラインでの適切な情報発信も必要だと感じました。

## ●謝辞

最後になりますが、今年度のプロジェクト研究

を担当した3名の先生方萩野先生、平井先生、三木先生、ご多忙にもかかわらず、コメントーターを引き受けてくださった兼城先生、農中先生、また、開会と閉会のご挨拶をしてくださった竹内先生、松田先生にこの場を借りて感謝を申し上げます。

**表 2 令和3年度プロジェクト研究報告会プログラム**

環境・災禍と人間 —地域内外の視点から見る良い暮らしの創造—		
司会者：平井一臣教授		
13:30 ~ 13:35	開会の辞	地域政策科学専攻長：竹内勝徳教授
13:35 ~ 13:45	趣旨説明	平井一臣教授
13:45 ~ 14:05	風水と現代生活—青島市の事例を中心に—	夏晨光
14:05 ~ 14:15	来場者による質疑応答	
14:15 ~ 14:25	コメントーター評論	兼城糸絵准教授
14:25 ~ 14:35	休憩	
14:35 ~ 14:55	水俣と福島が会うとき—原子力災害被災者の水俣訪問ツアーによるアクションリサーチ	石原明子
14:55 ~ 15:05	来場者による質疑応答	
15:05 ~ 15:15	コメントーター論評	農中至准教授
15:15 ~ 15:25	休憩	
15:25 ~ 15:55	ディスカッション	
15:55 ~ 16:00	閉会の辞	人文社会科学研究科長：松田忠大教授

# プロジェクト研究を振り返って

夏 晨光

今年度のプロジェクト研究は「環境・災禍と人間—地域内外の視点からみる良い暮らしの創造」という共通テーマに基づき、研究が進められた。この四ヶ月を改めて振り返ると、共通研究に対する不安や困惑があり、悔しさを持って成績を取めようという気持ちもありました。

学際的な研究は想像以上の困難であると痛感しました。共通テーマの設定から、分野が異なる研究者との交流や、新しい視点に基づいた解析等のかつてない課題の解決を通して、貴重な経験を積みました。特にこれからの研究に他分野の理解を加え、客観的な結果を出すために、プロジェクト研究の経験は莫大な助力があると考えられます。例えば、私の研究課題に対して、先生の方々から事例と結論の関連性が弱いことや、風水用語の説明が足りない指摘され、博士後期の先輩たちから研究の客観性や社会的意義に関するコメントもいただきました。これらのご指摘、ご助言は今後の課題として検討していきたいと思えます。

プロジェクト研究では多くの方々にお世話になりました。平井先生、三木先生、萩野先生からご指導をいただき、博士後期課程の先輩のみなさまにもご意見をいただきました。更に、地域政策特任助教兼教務補佐員の江山先生には、テーマの設定から発表会の準備まであらゆる面でお世話になりました。この場をお借りして、衷心より感謝申し上げます。

石原 明子

プロジェクト研究（プロ研）が始まる前、「プロ研は大変だよ。消耗するよ」と複数の方々から、“事

前の忠告”をいただいていた。おそらくその言葉の意味するところとしては、これだけ異なる学問分野の院生が同じテーマで取り組むことの困難や混乱が、これまでプロ研で経験されてきたからと思われる。

しかし一学期振り返ってみて、最初から最後まで、プロ研の時間は私にとって大変楽しく有意義なものであった。毎回の発表における先輩方や先生方からの質問は、的を得ていて、自分が普段考えたり大切にしたりしている点について多く議論をすることができた。また1年生の人数の少なさから、2年生以上の研究発表も伺うことができ、これがまた大変興味深かった。興味深いというのは、先輩方のテーマの設定が、この鹿児島地域（あるいはその近隣地域としてのアジア）を深く掘り下げる研究が多く、まさに「ローカルに深い」研究が多く、ああ、これが21世紀の大学の在り方・存在意義だなあと感嘆された。

毎回の授業での先輩方や先生方との議論を経て、迎えたプロ研の発表会の日。私のコメンテーターはお会いしたことのない農中至先生であった。事前のうわさでは農中先生は「ナイスなコメントをされる方。やさしい」と聞いていた。が、農中先生のコメントは「きつとわかり合えないことを前提にコメントしますが、大変違和感があります」と、発表に対しては一見「全面否定」のようなコメントだった。「やさしいって言ったの誰だ！」と内心思いながら、その矢のようにふる「批判的コメント」のメモを取りながら聞いていると、非常に面白い。すべて、このプロジェクトの裏に秘められた自分が普段大切にしている想いに切り込んでくるコメント。しかも私の過去の論文まで読んでくださった上でコメントくださっていた。そのコメントに私なりに丁寧にお答えして、プロ研発表会

を終えた。終えてから、私は自分の学問の枠による息苦しさから解放された気持ちがしていた。農中先生のコメントは、私自身の学術研究のイメージの中で「こういうことは学術研究の中ではしてはいけないことなのだ」と無理に押し込め殺してきていた「魂の部分」を掘り起こすものであったからだ。さてそのような「魂の部分」は学術研究に乗りえるのか、ということについて深めるやりとりが、プロ研後も農中先生と続いている。「学問のお作法」は学問分野によって違うが、学問分野を越えて、「魂を殺さない学問の在り方」を探求できるのも、これは学際研究科の恵み。期せずしてのこういう出会いがあるのも、プロ研の良さです。

プロ研で自分がなしえたプロジェクトのクオリティ自体は、限られた時間の中でとにかく単位を落とさないために取り組む低いレベルになってしまった。小さな子供を抱えたシングルマザーで、仕事もしている中で、これはこうしかできなかった、と感じている。それに対して、先輩方や先生方といただいた出会いの恵みの大きさに感謝をするばかりである。

## プロジェクト研究とは

「プロジェクト研究」は、地域政策科学専攻の必修科目である。この授業を通して、学生は自己のテーマや調査研究方法を模索し、中間発表を重ねて教員や他の学生からの意見や助言を聞き発表内容を固めながら、他分野の発表を聞き意見を陳述することで、研究者としての力を総合的に高める。

\*プロジェクト研究報告会は、この授業の一環として学生主体でテーマを決め、開催するものです。

### 令和3年度「プロジェクト研究報告会」概要

総合テーマ：環境・災害と人間—地域内外の視点から見る良い暮らしの創造—

開催日時：2022年1月29日（土）13:30～16:00

会場：Zoomによるオンライン開催

#### ◇研究報告

夏 晨光（文化政策コース1年）

石原 明子（地域政策コース1年）

#### ◇コメンテーター

兼城 糸絵（法文学部准教授）

農中 至（法文学部准教授）

#### ◇司会

三木 夏華（法文学部准教授）

### 令和3年度「プロジェクト研究」参加者一覧

履修院生：

地域政策コース 石原 明子（1年）

文化政策コース 山下 慶（3年）、アン ニ（2年）、富永 由侑（2年）

夏 晨光（1年）、任 軼（1年）

島嶼政策コース 竹下 友章（3年）、才 娜（2年）

担当教員：萩野 誠（島嶼政策コース・人文社会科学研究科教授）

平井 一臣（地域政策コース・人文社会科学研究科教授）

三木 夏華（文化政策コース・人文社会科学研究科准教授）

指導補助：江 山（人文社会科学研究科特任助教）

## プロジェクト研究報告集 第19号

---

印刷 2022年3月25日

発行 2022年3月31日

発行所 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科

(博士後期課程) 地域政策科学専攻

〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21番30号

TEL・FAX 099-285-3573

E-mail lehdoc@leh.kagoshima-u.ac.jp

URL [http://www.leh.kagoshima-u.ac.jp/wp\\_leh/?page\\_id=13129](http://www.leh.kagoshima-u.ac.jp/wp_leh/?page_id=13129)

---

印刷・製本 濱島印刷株式会社

---

©2021無断複写・転載を禁ず

ISSN 1882-5648

